

中国人日本語学習者の あいづちバリエーションの 習得状況

— 来日留学生の縦断的調査を通して

関 玲

◆要旨

本稿はあいづちのバリエーションに着目し、中国人上級日本語学習者と日本語母語話者を比較してどのように差異があるかを考察した。その結果、学習者は母語話者と比べて「へ、エ、その他（ナルホド、ホントウ等）」系あいづちの使用が少なく、「ウン」系・「ソ」系あいづちを使用していることが明らかになった。また、学習者が日本に1年間滞在してどのようにあいづちのバリエーションを習得していくかを考察するため、3回の会話調査を縦断的に行い、分析した。その結果、学習者は1年間日本に滞在して「ハイ」系あいづちの非使用とともに丁寧体と普通体の使い分けを習得できていることが確認されたが、全体のバリエーション数については顕著な増加傾向は見られなかった。

◆キーワード

中国人日本語学習者、あいづちのバリエーション、習得、縦断的調査、丁寧体と普通体の使い分け

◆ABSTRACT

This research focuses on the variations in back-channels and examines the differences in back-channels between advanced Chinese learners of Japanese and native Japanese speakers. The results show that, in comparison to native speakers, Chinese learners use [hee, ee and other back-channel (such as naruhodo, hontou etc.)] series less frequently, while using back-channels like [un, soo] series more frequently. Moreover, a longitudinal study was conducted to investigate how the learners acquired variations in back-channels while residing in Japan. The data was collected three times over a period of one year. The results show that learners could master the specific uses of Japanese plain and polite style as well as nonuse of back-channels like [hai] series during their year-long stay. However, there was no notable increase in the total number of variations used.

◆KEY WORDS

Chinese learners of Japanese, Variations in back-channels, Acquisition, Longitudinal study, the specific uses of the Japanese plain and polite style

Acquisition of Back-Channel
Variations by Chinese Speaking
Learners of Japanese
A longitudinal study of foreign students
residing in Japan
LING GUAN

1 はじめに

日本語教育においてあいづちに関する先行研究は従来、学習者のあいづちの自然さあるいは適切さが重視され、あいづちの頻度・打つタイミング・機能についての検討が中心に行われてきた(水谷1984, 小宮1986, 松田1988, メイナード1993等)。一方、もう1つの重要な要素であるあいづちのバリエーションに焦点を当てて検討した研究は少ない。以下の例1では学習者Cと日本語母語話者Jが「東日本大震災の大学入学の影響」について話している。

例1 【東日本大震災の大学入学の影響】

- 1 J : 結局筑波に4月に普通に入学しに行って一って感じ
2 C : あー^[注1]、で、
3 C : その時親心配してる？
4 J : 心配したもう、行かない方がいいんじゃないみたいな、
5 J : なんか放射能とかいろいろあったから、
6 C : そうそうそう
7 J : 安全、沖縄のが安全でしょって、
8 C : そうそうそう
9 J : すごい言われたけど、せっかく合格したしー
10 C : そうそうそう
11 J : もうね、行かなきゃ
12 J : うんー

例1では、学習者Cは6、8、10行目で同じ形式のあいづち「そうそうそう」を使用している。ここでは、学習者は適切な位置であいづちを打っているように見えるが、使用されるあいづちの形式のバリエーションは少なく単調な印象を受ける。この3箇所「そうそうそう」だけでなく、「うんうん」「そっかそっか」「そうだよね」等の形式が導入されれば、より豊かな会話を構築することができると考えられる。このように、あいづちのバリエーションはより豊か

な会話効果にかかわっている重要な要素であるが、これに焦点を当てる先行研究は管見の限りまだ少ない。そこで、本研究では、あいづちのバリエーションに焦点を当て、学習者がどのようにあいづちのバリエーションを習得していくかを考察する。

2 先行研究と研究目的

2.1 先行研究

あいづちの習得についての研究には、異なる学習段階(日本語レベル)、あるいは異なる学習歴の学習者間で比較を行うような横断的調査もあれば、ある特定の段階の学習者を対象に時間の経過とともに考察するような縦断的調査もある。以下、2.1.1で横断的調査に関する先行研究を紹介し、2.1.2では縦断的調査に関する先行研究を紹介する。

2.1.1 横断的調査に関する先行研究

日本語学習者のあいづちの習得について、横断的調査を行ったものは山本(1992)、渡辺(1994)、窪田(2000)、柳(2002)が挙げられる。

山本(1992)では、中国語、韓国語、英語を母語とする9名の学習者(初級3名、中級4名、上級2名)を対象に、1名の日本語母語話者とのインタビュー調査を行っており、若干の例外を除けば、学習段階が上の学習者はあいづちの種類が増えているという結果を得ている。山本(1992)と同様の結果を報告しているのは柳(2002)である。柳(2002)では、日本に滞在していない台湾人日本語学習者20名(中級14名、上級6名)を対象に、初対面の日本語母語話者との電話会話を資料とし、分析を試みた。その結果、学習者の日本語レベルが高くなるとともにあいづちの種類も増加していくと報告している。

一方、学習者のあいづちの習得は特に学習者の発達段階・日本語レベルと関係がないと渡辺(1994)、窪田(2000)は述べている。渡辺(1994)は中国語、韓国語、英語を母語とする学習者19名(初級6名、中級8名、上級5名)を対象に、1名の日本語母語話者とのインタビュー調査を実施し、分析を行った。その結

果、学習者の発達段階とあいづちの習得との間には相関関係がほとんどなく、また、学習者が使用するあいづちの種類にも、発達段階による特定の傾向は見られなかったとしている。また、窪田（2000）では、英語を母語とする初級と上級の学習者10名（初級、上級各5名）を対象に、初対面の日本語母語話者との自由会話を2回調査し、分析を行った。「相づち詞」に関する結果としては、「日本語能力が高くなるにつれて相づち詞の種類も増えていくとは一概に言えない」と述べている。

上記の4つの先行研究を概観すればわかるように、学習者のあいづちの種類や習得について、学習者の習熟度が上がるにつれ、増えていくと報告しているもの（山本1992, 柳2002）もあれば、そうでないもの（渡辺1994, 窪田2000）もある。この結果の相違が生じた理由として各調査における学習者の属性が異なることと調査の方法の違いが考えられる。このように、横断的調査では個人の属性の影響が排除しきれないと思われるため、学習者の習得状況を正確に把握できないという問題点があり、学習者のあいづちバリエーションの習得状況を統一された条件で縦断的に考察していく必要がある。

2.1.2 縦断的調査に関する先行研究

縦断的調査を通して学習者のあいづちの習得を考察した先行研究は寺尾（2008）と山中（2012）が挙げられる。

寺尾（2008）では、1名の初級中国人学習者を対象に、日本に来て3ヶ月後、7ヶ月後、11ヶ月後の3期に分けて、ある日本語教師とのフォーマル場面での会話データを収集し、分析を行った。あいづちの形式に関して、習熟度が進むにつれ、最もよく使用される形式が「ソウデス」から「ハイ」へと変化するという特徴が見られ、また、全体的傾向として、日本語の習熟が進んでも、あいづちの形式的なバリエーションは増えないという結果が得られた。

山中（2012）では、6名の中国人技能実習生（1期生3名、2期生3名）を対象に、調査者との会話を分析資料とし、あいづちの習得過程を分析した。あいづちの形式に関する結果としては、協力者全体を総合してみると、「ハイ」の割合は減少傾向にある。その一方、「ソウ」の産出は全体の調査を通して1度も見られなかった。

上記の2つの先行研究からは縦断的調査を通して学習者のあいづちのバリエーション習得に関して大きな知見が得られる。しかし、この2つの研究の結果には相違が見られる。例えば、「ハイ」に関しては、寺尾（2008）では増加する傾向にあるが、山中（2012）では減少する傾向が見られた。それはこの2つの研究の研究対象や場面の差異によるものであると考えられる。つまり、会話調査の研究対象及び場面の違いにより、日本に滞在する期間と「ハイ」系のあいづちの使用傾向を容易に結び付けることはできないということである。このことから、同じあいづちでも、異なる研究対象と異なる調査条件とでは、異なる結論に至る可能性があることが言えよう。学習者の習得過程の特徴をより厳密に見出すためには、対象者の条件や場面を整える必要があると考えられる。

2.2 研究目的

以上の先行研究を踏まえ、本研究は学習者のあいづちバリエーションの習得状況を見出すために、研究対象の条件や場面を整えた上で、縦断的調査を行うこととする。また、以下の2点について考察することを本研究の目的とする。

- ①あいづちのバリエーションにおいて、学習者と日本語母語話者を比較してどのように違うか。
- ②学習者が日本に滞在する1年間で、あいづちのバリエーションは変化するか。もし変化するならば、どのように変化していくか。

3 あいづちの定義と形式

あいづちの定義については各研究の目的や立場によって様々である。本研究では、メイナード（1993）におけるあいづちの定義^[注2]及び堀口（1997）^[注3]におけるあいづちの機能を参考にし、あいづちを以下のように定義した。

あいづちとは、話し手が発話権を行使している間、また話し手が発話を終了した後に、聞き手もしくは話し手が発する実質的な内容を含まない、「聞いている」、「理解している」、「同意、否定の意を表す」、「感情を表出する」という機能を持っている短い表現である。

上記のあいづち定義に基づき、本研究では、あいづちを以下の8種類、すなわち、ウン系（ウン、ウンウン等）、ハイ系（ハイ、ハイハイ等）、ア系（ア、アア等）、ヘ系（ヘー、ヘー等）、エ系（エー、エー等）、ソ（ソウ、ソウソウソウ、ソウナンダ等）系、否定（ヤ、イヤ、イエ等）系、その他（ナルホド、ホントウ、タシカニ等）系のように分類した。

4 調査方法

本研究では、初めて来日する6名（C1～C6）の中国人上級日本語学習者（以下学習者）を対象に、1年間の縦断的調査を行った。この6名の学習者全員は中国の母校では日本語を専攻して勉強しており、日本語学習歴は2年～5年^[註4]である。また、この6名の学習者は調査を受けていた時に、日本の大学で1年間の交換留学の資格を持っており、この交換留学の前に日本に滞在したことはない。さらに、学習者全員は調査時点で日本語能力試験N1の資格を持っており、日本語レベルは上級である。調査は2014年10月から2015年8月にかけて実施した。具体的には、学習者が来日して1～2ヶ月目、7ヶ月目、10～11ヶ月目の3回、それぞれ親しい日本語母語話者との30分間程度^[註5]の会話を録音・録画した。3回の会話調査を通して、計約552分間の会話データを収録した。また、会話調査を始める前に、協力者に「普通体で会話してください」と指示を行った。さらに、男女の性差によってあいづちのバリエーションの産出が異なると考え、今回の調査では協力者を全員女性という条件で統制した。

また、学習者と比較を行うため、日本語母語話者同士（以下母語話者）の会話も同様の条件で2組4人分（J1～J4）、計約63分間の会話データを収録した^[註6]。収録した会話データを文字化し、文字化した資料を分析資料とした。文字化した資料からあいづちを抽出し、それぞれの種類のあいづちの出現回数及び全体に占める割合を計算した。

5 結果と考察

5.1 学習者と母語話者との比較

ここでは、あいづちのバリエーションにおいて、学習者と母語話者でどのように違うかを見ていく。そして、学習者が最も習得できている3回目の会話調査の結果を母語話者と比較することにする。以下の表1では、各話者が使用したあいづちの回数及びそれぞれの種類のあいづちが全体に占める割合をまとめた。また、比較するために、学習者6名のあいづちの割合の平均値（C）と母語話者4人の平均値（J）を示した。さらに、図1と図2では、母語話者と学習者それぞれのあいづちのバリエーションについて割合を示した。示したのは母語話者と学習者で差が比較的大きかった「ヘ」系、「エ」系、「その他」系あいづち（図1）と「ウン」系、「ソ」系あいづち（図2）である。なお、母語話者は学習者と比べて個人差がそれほど大きくないため、母語話者4人の平均値を母語話者の使用した基準とした。

表1 学習者と母語話者のあいづちの使用回数（回）及び割合（％）

話者	種類（回（％））								
	ヘ	エ	その他	ウン	ソ	ア	否定	ハイ	合計
C1	11 (7.6)	6 (4.2)	19 (13.2)	87 (60.4)	11 (7.6)	5 (3.5)	4 (2.8)	1 (0.7)	144 (100)
C2	5 (2.9)	15 (8.7)	12 (7.0)	108 (62.8)	4 (2.3)	18 (10.5)	10 (5.8)	0	172 (100)
C3	2 (0.4)	15 (3.3)	18 (3.9)	292 (63.8)	58 (12.7)	73 (15.9)	0	0	458 (100)
C4	2 (1.0)	6 (2.9)	5 (2.4)	113 (54.6)	51 (24.6)	28 (13.5)	2 (1.0)	0	207 (100)
C5	13 (4.1)	0	4 (1.3)	186 (59.2)	67 (21.3)	43 (13.7)	1 (0.3)	0	314 (100)
C6	0	3 (1.2)	25 (10.3)	62 (25.4)	121 (49.6)	28 (11.5)	5 (2.1)	0	244 (100)
C	2.7	3.3	6.4	54.4	19.7	11.4	2	0.1	100
J1	13 (8.6)	8 (5.3)	29 (19.1)	57 (37.5)	27 (17.8)	17 (11.2)	1 (0.7)	0	152 (100)
J2	7 (2.9)	5 (2.0)	33 (13.5)	96 (39.2)	71 (29.0)	30 (12.2)	3 (1.2)	0	245 (100)
J3	14 (6.9)	13 (6.4)	34 (16.8)	58 (28.7)	59 (29.2)	22 (10.9)	2 (1.0)	0	202 (100)
J4	7 (2.1)	12 (3.6)	34 (10.2)	213 (63.6)	39 (11.6)	27 (8.1)	3 (1.0)	0	335 (100)
J	5.1	4.3	14.9	42.2	22	10.6	1	0	100

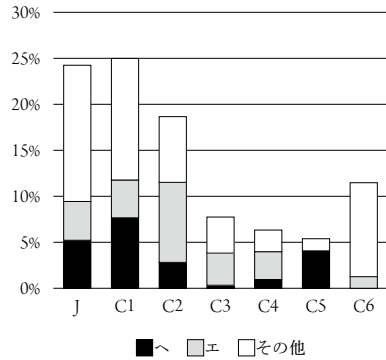


図1 「へ、エ、その他」系あいづちの比較

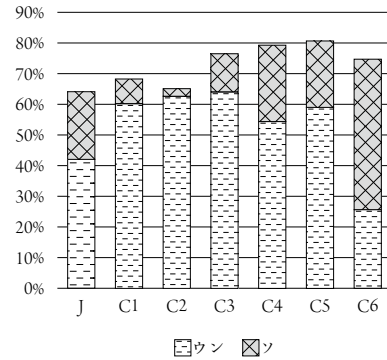


図2 「ウン、ソ」系あいづちの比較

表1と図1、図2からわかることを以下にまとめる^[註7]。

「へ」系、「エ」系、「その他」系あいづちの使用に関して、個別の学習者を除けば、学習者の使用は母語話者より少ないことがわかる。例えば、「へ」系あいづちを例として言うと、母語話者は5%使用しているのに対して、学習者C1を除けば、他の学習者は全員5%以下の使用となっている。そのうち、特にC6では「へ」系の使用がゼロとなっており、目立っている。

「へ」系、「エ」系、「その他」系あいづちの使用に対して、学習者C1～C5は6割近くか6割以上「ウン」系あいづちを使用している。その一方、母語話者は平均で約4割「ウン」系あいづちを使用している。さらに、学習者C6は約5割使用しているが、母語話者は約2割が「ソ」系あいづちを使用している。

次に、「ア」系あいづちと「ハイ」系あいづちの使用について見ていく。表1に示しているように、母語話者と学習者ともに「ア」系あいづちは約1割使用しており、それほど差が見られない。そして、「ハイ」系あいづちの使用は学習者C1の1回の使用以外に、学習者と母語話者ともに使用されなかった。

以上をまとめてみると、学習者は母語話者と比べて、「へ」系、「エ」系、「その他」系あいづちの使用が少なく、それに対して、「ウン」系、「ソ」系の使用が多いことがわかった。また、全体のバリエーションについて言うと、学習者は母語話者と比べて、あいづちの使用が偏っており、特に「ウン」系あるいは「ソ」系のあいづちに依存している。さらに、以上のあいづちに対して、学習

者の「ア」系と「ハイ」系あいづちの使用は母語話者と比べてそれほど差がないことがわかった。この2種類のあいづちに関して、学習者の使用は母語話者に近いと言えよう。

以上、学習者の3回目の調査、つまり学習者が1年間の滞在で習得が最もできていると考えられる結果を母語話者と比較した。次項では学習者が1年間の滞在中で、どのようにあいづちのバリエーションを習得してきたかを見ていく。

5.2 学習者の1年間の習得状況

5.2.1 あいづちのバリエーションの全体について

ここでは、学習者が1回目～3回目の会話調査を通して、どのようにあいづちのバリエーションを習得してきたかを見ていく。表2は、各学習者の1回目～3回目の会話調査におけるあいづちの使用回数(回)及び各種類が全体に占める割合(%)をまとめたものである。

表2 各学習者の1～3回目の会話調査におけるあいづちの使用回数(回)及び割合(%)

話者	会話	種類(回(%))								
		へ	エ	その他	ウン	ソ	ア	否定	ハイ	合計
C1	1	1 (0.6)	13 (8.0)	7 (4.3)	93 (57.1)	16 (9.8)	27 (16.6)	2 (1.2)	4 (2.5)	163 (100)
	2	6 (3.5)	6 (3.5)	15 (8.8)	104(60.8)	19 (11.1)	16 (9.4)	5 (2.9)	0	171 (100)
	3	11 (7.6)	6 (4.2)	19 (13.2)	87 (60.4)	11 (7.6)	5 (3.5)	4 (2.8)	1 (0.7)	144 (100)
C2	1	0	1 (0.6)	1 (0.6)	134(80.7)	4 (2.4)	16 (9.6)	6 (3.6)	4 (2.4)	166 (100)
	2	0	23 (10.8)	11 (5.1)	154(72.0)	1 (0.5)	11 (5.1)	14 (6.5)	0	214 (100)
	3	5 (2.9)	15 (8.7)	12 (7.0)	108(62.8)	4 (2.3)	18 (10.5)	10 (5.8)	0	172 (100)
C3	1	4 (1.0)	26 (6.4)	6 (1.5)	176(43.2)	72 (17.7)	115(28.3)	0	8 (2.0)	407 (100)
	2	0	27 (6.2)	13 (3.0)	237(54.5)	61 (14.0)	93 (21.4)	2 (0.5)	2 (0.5)	435 (100)
	3	2 (0.4)	15 (3.3)	18 (3.9)	292(63.8)	58 (12.7)	73 (15.9)	0	0	458 (100)
C4	1	0	7 (2.5)	13 (5.3)	35 (12.3)	57 (20.1)	35 (12.3)	6 (1.8)	130(45.8)	283 (100)
	2	5 (2.5)	11 (5.5)	8 (4.0)	86 (42.8)	52 (25.9)	36 (17.9)	2 (1.0)	1 (0.5)	191 (100)
	3	2 (1.0)	6 (2.9)	5 (2.4)	113(54.6)	51 (24.6)	28 (13.5)	2 (1.0)	0	207 (100)
C5	1	0	0	4 (1.4)	218(78.7)	18 (6.5)	31 (11.2)	6 (2.2)	0	277 (100)
	2	7 (2.1)	2 (0.6)	8 (2.4)	211(63.2)	49 (14.7)	56 (16.8)	1 (0.3)	0	334 (100)
	3	13 (4.1)	0	4 (1.3)	186(59.2)	67 (21.3)	43 (13.7)	1 (0.3)	0	314 (100)
C6	1	2 (0.9)	1 (0.5)	19 (9.0)	25 (11.9)	130(61.9)	9 (4.3)	1 (0.5)	23 (11.0)	210 (100)
	2	1 (0.4)	6 (2.5)	25 (10.3)	64 (26.2)	70 (28.7)	55 (22.5)	3 (1.2)	20 (8.2)	244 (100)
	3	0	3 (1.2)	25 (10.3)	62 (25.4)	121(49.6)	28 (11.5)	5 (2.1)	0	244 (100)

表2を概観するとわかるように、1回目～3回目の会話調査に渡って、学習者全員に共通した何らかの一貫した変化が見られるあいづちは1つもない。しかし、「へ」系、「その他」系、「ウン」系、「ソ」系、「ア」系、「ハイ」系あいづちに関しては、学習者全員に共通の一貫した変化は見られないが、それぞれの形式において、個別の学習者の変化は見られる。どのような変化が見られるかについて、以下「その他」系あいづちを例として取り上げて説明する。図3では、各学習者の「その他」系あいづちの1回目～3回目の会話調査における使用した割合を示す。

図3に示すように、学習者C1、C2、C3は3回の会話調査を通して、「その他」系あいづちの使用は徐々に増えていったが、C4、C5、C6はそういった一定した変化は見られない。この結果から、学習者C1、C2、C3はこの1年間「その他」系あいづちを徐々に習得していったと言える。ただし、それらのあいづちの変化は決して顕著ではなく、また、増加していったと言っても、3回目の調査結果を母語話者と比較してわかるように、母語話者より少ない。

「その他」系あいづちのように、使用変化が見られる他の種類のあいづちについても、個別の学習者には使用変化が見られたが、学習者全員に共通した一

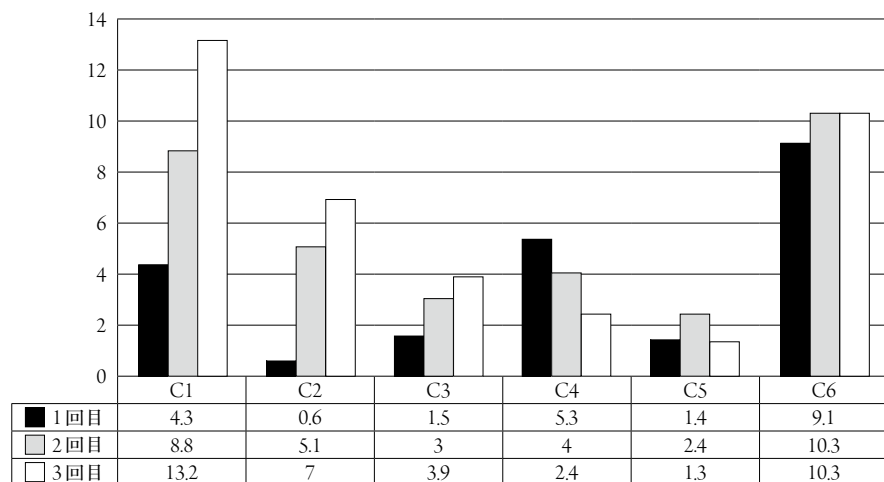


図3 各学習者の1～3回目の会話調査における「その他」系あいづちの使用変化（割合・%）

貫した変化は見られなかった。つまり、学習者は1年間日本語の環境に滞在しても、「ウン」系、「ソ」系あいづちに偏って使用する問題点は依然として存在しており、全体のあいづちのバリエーションはほとんど変わらなかった。では、学習者はこの1年間は何も習得できていないということだろうか。次に、「ハイ」系あいづちを取り上げて見ていきたい。

5.2.2 「ハイ」系あいづちについて

あいづちのバリエーションについて、全員に共通した一貫した変化が見られたものはないと前述したが、「ハイ」系あいづちはこの8種類のあいづちの中では変化が最も大きく見られたものである。以下、学習者の「ハイ」系あいづちの使用について見ていく。

中島（2000）では、「ハイ」がフォーマル場面で相手が非常に疎遠な間柄の時に使われるのに対し、「ウン」はフォーマル・インフォーマル場面とも親しい間柄の時に多く使われる傾向があると指摘している。この調査は親しい友人同士の会話として設定されており、インフォーマル場面に相当する。従って、特定の場面〔注8〕がない限り、会話の中には「ハイ」系あいづちが産出されないはずである。実際、2組4人分の母語話者同士の会話を見てみると、「ハイ」系あいづちは1回も産出されていないことがわかった。では、学習者はどうなっているだろうか。

表3は、表2から「ハイ」系あいづちの結果を抜粋し、各学習者の1回目～3回目の会話調査の使用回数及びあいづち全体に占める割合をまとめたものである。

表3 各学習者の1～3回目の会話調査における「ハイ」系の使用状況

会話	学習者（回（%））					
	C1	C2	C3	C4	C5	C6
1回目	4 (2.5)	4 (2.4)	8 (2.0)	130 (45.8)	0	23 (11.0)
2回目	0	0	2 (0.5)	1 (0.5)	0	20 (8.2)
3回目	1 (0.7)	0	0	0	0	0

表3を見るとわかるように、1回目の会話調査時には、学習者6名のうち5名

(C1、C2、C3、C4、C6)が「ハイ」系あいづちを使用した。また、この5名の学習者のうち3名(C3、C4、C6)は、2回目の会話調査時においても「ハイ」系あいづちを使用した。使用回数は1回目より減った。3回目の会話調査では、学習者はほとんど「ハイ」系あいづちを使用しておらず、C1のみ1回の使用が見られた。以上の結果をまとめて言うと、学習者は日本に滞在する期間が長くなるにつれ、友人同士の会話場面で「ハイ」系あいづちを徐々に使用しなくなっていると言える。

また、この「ハイ」系あいづちの使用に関連しているもうひとつの現象、インフォーマル場面においてあまり使用されない文末表現の「デス・マス」の使用にも同様の傾向が見られる。表4は、各学習者の1回目～3回目の会話調査における文末に使用する「デス・マス」の使用回数をまとめたものである。

表4 各学習者の1～3回目の会話調査における「デス・マス」の使用状況

会話	学習者(回)					
	C1	C2	C3	C4	C5	C6
1回目	7	1	9	12	1	4
2回目	1	0	6	3	0	1
3回目	0	0	4	1	0	0

表4に示すように、学習者全員が1回目～3回目の会話調査を通して、文末表現の「デス・マス」を使用しなくなっている。このうち、C4は1回目の調査時に12回使用しており、6名の学習者のうち最も多かったが、2回目、3回目の調査時になると、それぞれ3回、1回というように次第に減っていった。これはC4の「ハイ」系あいづちの使用状況とほとんど一致しており、文末表現の「デス・マス」と「ハイ」系あいづちの使用との間に関連性が見られる。また、他の学習者にもこの関連性が確認できる。

文末表現の「デス・マス」と「ハイ」系あいづちはフォーマル場面において使用されると前述したように、学習者による会話中は丁寧体と普通体の使い分けの問題がかかわっている。学習者が「デス・マス」を使用しなくなっていくこの傾向は「ハイ」系あいづちの減少傾向と一致している。このことから、学習者はインフォーマル場面において、丁寧体と普通体の使い分けとともに「ハ

イ」系あいづちの非使用を習得していったことが考えられる。すなわち、学習者は「ハイ」系あいづちの非使用を単独で習得していくわけではなく、丁寧体と普通体の使い分けとともに習得していくことが示唆される。

5.3 まとめ

以上をまとめると、まず全体のバリエーションについて、学習者は母語話者と比べて、「へ」系、「エ」系、「その他」系のあいづちの使用が少なく、それは学習者が「ウン」系あるいは「ソ」系のあいづちの使用に依存しているためであることが明らかになった。また、学習者が1年間日本に滞在した結果、「ハイ」系あいづちとともに丁寧体と普通体の使い分けは習得できたが、「へ」系、「エ」系、「その他」系のあいづちの習得までには至っていないことがわかった。つまり、学習者は日本に1年間滞在しても、全体のあいづちのバリエーションはほとんど変わらず、母語話者と比べて少ないままである。

あいづちのバリエーションの習得は文法や語彙と異なり、自然習得に委ねることが多い。本研究は自然習得の環境にいる学習者を対象に、あいづちのバリエーションの習得過程を1年間というスパンで観察してきた。学習者がこの1年間あいづちのバリエーションをほとんど習得できていない結果から、学習者は自然習得の環境にいるとしても、丁寧体と普通体の使い分けのような習得できる項目がある一方で、あいづちのバリエーションのようになかなか習得できない項目があることが言える。また、あいづちのバリエーションのような項目を習得するにはより長期の日本語環境によるインプット、もしくは意識的な学習が必要であることも示唆される。

6 おわりに

本稿はあいづちのバリエーションについて、学習者と母語話者を比較してどのように違うかを分析した。その結果、学習者は母語話者と比べて、「へ」系、「エ」系、「その他」系のあいづちの使用が少なく、「ウン」系あるいは「ソ」系のあいづちの使用に依存していることが明らかになった。また、学習者がどのようにあいづちのバリエーションを習得していくかについて3回会話調査を

行い、考察した。その結果、学習者は1年間日本に滞在して、インフォーマル場面における「ハイ」系あいつちの非使用とともに丁寧体・普通体の使いわけを習得できた一方で、「へ」系、「エ」系、「その他」系あいつちは習得できておらず、それによってあいつちの全体のバリエーションもほとんど変わらなかった。本稿は学習者の習得状況を考察してきたが、学習者がなぜあいつちのバリエーションをなかなか習得できないかについて今後の課題としたい。

〈筑波大学大学院生〉

謝辞

本稿は日本語教育学会2016年度春季大会におけるポスター発表の内容に加筆・修正を加えたものです。当日の参加者から有益なご意見をいただきました。ここに記して感謝を申し上げます。また、本稿の執筆にあたり、ご指導を賜った澤田浩子先生（筑波大学）、貴重な修正コメントをくださった査読の先生方、会話調査を快く引き受けてくださった協力者の皆さまには深く感謝いたします。

注

- [注1] …… 「あー」の「ー」は音の延長を示す。
- [注2] …… メイナード（1993: 58）では、あいつちの定義を「話し手が発話権を行使している間に聞き手が送る短い表現（非言語行動を含む）で、短い表現のうち話し手が順番を譲ったとみなされる反応を示したものは、あいつちとしない」としている。
- [注3] …… 堀口（1997）では、あいつちの機能を「聞いている信号」「理解している信号」「同意の信号」「否定の信号」「感情の表出」のようにまとめている。
- [注4] …… C1、C2、C3、C4、C5調査時点で大学生であり、1回目の会話調査時には2年～3年日本語を勉強していた。また、C6はこの6名の協力者の中では唯一の大学院生であり、1回目の会話調査時には5年間日本語を勉強していた。
- [注5] …… 3回の会話調査で収録した会話データの長さの詳細は以下の表1の通りである。また、毎回の会話データの長さが異なるものの、今回の分析は主にあいつちのバリエーションの割合に基づいて行ったため、データの長さの違いは結果に特に影響を与えないと判断した。

表1 収録した会話データの詳細

	1回目	2回目	3回目
C1	30分16秒	31分9秒	30分34秒
C2	30分15秒	30分52秒	30分56秒
C3	32分28秒	30分29秒	31分40秒
C4	31分7秒	32分55秒	31分2秒
C5	31分52秒	31分29秒	31分6秒
C6	31分19秒	30分21秒	30分21秒

- [注6] …… 収録した2組の母語話者同士の会話はそれぞれ32分41秒のものと30分27秒のものであった。
- [注7] …… あいつちのバリエーションについてまとめる際に、学習者と母語話者と比較して同様の結果を得ている種類はまとめて述べる。また、「否定」系あいつちに関しては、「否定」されるような話題が出ない限り出現しないと予測できるため、つまり、「否定」系あいつちは他の種類のあいつちと比べて話題に依存しているため、今回は比較しないこととした。以降も同様である。
- [注8] …… 「特定な場面」というのは、「ハイ」系あいつちが出やすい場面である。中島（2001）では、フォーマル・インフォーマル場面にかかわらず、「ハイ」は①真偽疑問文に対する応答、②付加疑問文（終助詞「ね」）に対する応答、③要求文に対する応答、④呼びかけに対する応答、⑤儀礼的応答として使用されやすいと述べており、本稿ではこの5つの場面を「特定な場面」とする。

参考文献

- 窪田彩子（2000）「日本語学習者の相づちの習得—日本人との初対面における会話資料を基に」『南山日本語教育』7, pp.76–114. 南山大学大学院外国語学研究所
- 小宮千鶴子（1986）「相づち使用の実態—出現傾向とその周辺」『語学教育研究論叢』3, pp.43–62. 大東文化大学語学教育研究所
- 寺尾綾（2008）「ある中国語を母語とする日本語学習者の言語的あいつち—日本語の習熟度からみた縦断的分析」『阪大日本語研究』20, pp.91–117. 大阪大学院研究科日本語学講座
- 中島悦子（2000）「あいつちに使用される「はい」と「うん」—あらたまり度・待過度から見た出現実態」『ことば』21, pp.104–113. 現代日本語研究会
- 中島悦子（2001）「自然談話における応答詞の使い分け—「はい」と「うん」、「いいえ」と「ううん」」『国士館短期大学紀要』26, pp.75–99. 国士館短期大学人文学会
- 堀口純子（1997）『日本語教育と会話分析』くろしお出版
- 松田陽子（1988）「対話の日本語教育学—あいつちに関連して」『日本語学』7(13), pp.59–66. 明治書院
- 水谷信子（1984）「日本語教育と話しことばの実態—あいつちの分析」『金田一春彦博士古稀記念論文集 第二巻 言語学編』pp.261–279. 三省堂
- メイナード・K・泉子（1993）『会話分析』くろしお出版
- 渡辺恵美子（1994）「日本語学習者のあいつちの分析—電話での会話において使用された

- 言語的あいづち』『日本語教育』82,pp.110-122. 日本語教育学会
- 山中鉄斎 (2012)「中国人技能実習生による日本語あいづち習得の縦断的習得研究」『日本語支援教育研究 (1)』pp.37-50. 日本語支援教育研究会
- 山本恵美子 (1992)「日本語学習者のあいづち使用実態の分析—頻度及び種類」『言語文化と日本語教育』4,pp.22-34. お茶の水女子大学内日本言語文化学会
- 柳川子 (2002)「台湾人日本語学習者における相づち使用の考察—相づち詞の種類を中心に」『日本語教育と異文化理解』創刊号,pp.45-53. 愛知教育大学国際教育学会